三豊市立高瀬中学校　令和５年度 校長通信 №７　令和６年３月１３日

一歩、前進

２年生にバトンは渡された

細かい違いはあるのだが、ほぼ従来通りの卒業式が、厳粛かつ晴れやかな雰囲気の中で行われた。かつてはかなり練習もしていたことを考えると、全体として立派な態度であったと思う。中でも、歌がやはり式を彩るのだと再認識した。式の始まりに歌う君が代。最後に歌う校歌。そして式後に歌う卒業生合唱と、在校生による見送りの歌。４年ぶりとは思えないような歌声があってこその卒業式だった。

さて、３年生が卒業したということは、２年生にバトンが渡されたということである。中学生としての３年間は、体も心も大きく成長するので、学年差がかなりある。ということは、中学３年生は、最上級生としての意味がかなり大きいということだ。つまり、その学校の象徴、顔だと言えるのである。

卒業式の式辞で「優れた役者は後ろ姿で演技すると言います。私たちはそこに何かを感じるのであり、その人の後ろ姿もまた、何かを表現しています。その何かとは心であり、その心を想像力が捉えるのです」と話した。誤解の無いように言うと、これは「役者が背中で演技する」と言うのが分かりやすいと思ってそう言っているのであり、「演じる」とはどういうことか、ということも含んでいる。だから「優れていなければ後ろ姿で表現していない」ということになるわけではない。つまり、優れていようがいまいが、後ろ姿はその人の心を表現しているのである。

話をバトンに戻す。「バトンを渡す」というのは言うまでも無く比喩である。リレーで使うバトンではもちろんないし、具体的な何かというわけでもない。あえて言うなら「存在感」と言えるだろうか。「学校の象徴、顔としての存在感」である。存在感は雰囲気のようなものだから、存在感を高めようとしてすぐに高まるものではない。日々の積み重ね、生き方によっておのずと形づくられるものだ。しかし、集団としての存在感や雰囲気ということになると、集団としての価値観の共有が大切になる。人の言動は価値観に基づいているからである。

２年生が、どのようにバトンを受け継ぎ、存在感を高め、どのようにバトンを１年生に渡すのか。これからの１年にかかっている。

（校長:佐　藤　浩　二）